

## 祝 辭

教 授 山 下 英 夫

立教大學經濟學會が今年を以て滿十年を迎へると云ふ。私が學校に席をおいてから八年になるから學會の方が二年の先輩である。然し實際に學會に交渉を持つようになったのは更に晚かつた。今學校に残つてをられる鈴木君のクラスからであるから丁度六年前である。

その年に初めて學會ではゼミナール（演習）の制度を設けた。私にも開講の希望がつたへられたので當時論争が旺んに行はれてゐた明治維新史をテーマに選んだ。その席上で初めて學會の俊秀な諸君と親しく膝を交へて語る機會を得たのである。前後數回にわたる報告討論は活潑に行はれて、講するものにも聴くものにも幾多の感銘を與へた。今に想ひ出して懐しい會合であつた。それが機縁となつて學内の改革の際にゼミナールの制度が學校に採り入れられることになつたのである。ゼミナールが今學生間に如何に有効に利用され、教授と學生間の接觸を深めてゐるかは衆知の事實である。そのゼミナール制度の生みの親が實は吾學會であることを思へば、學會の功績も大であると云はなければならない。

ゼミナールを學校に熨斗をつけて献上した後も、學會は講演會に學生生活調査にと實によく次々と實質的な仕事を續けて來た。講演會の開催は時局から講師の顔振れを揃へる上に幾多の困難があつたに拘らずよく學内において獨占的に然し良心的に實行して來た。殊に學生々活調査に至つては正に學校のためにも劃期的な仕事であり、學會の能力をよく證明して一層その重みを増した仕事であつた。幾晩か演習室で委員諸君と統計の整理や原稿の校正に仕事を共にした想ひ出は今に懐しい。

この青年學會は内外の情勢に處して波瀾の多い歳月を積んだ。その間の諸々の出來事に私は直接にか間接にか何らかの關係を持ちつゞけて來た。それだけに今十年の喜びを共にするのは感慨の深いものがある。然しその間に處して吾學會が終始正統なる研究の態度を捨てず、學内における唯一の文化的活動團體としての使命を貫徹して來たことは、確かに偉とするに足る。恐らくこの使命はこの後も永久に守り續けられるであらうし、又守り續けねばならない。十年の歳月は決して短しとしない。然し更に十年先の青年期、二十年先の壯年期を控へてゐる。學會の前途は多望であり又多難でもある。あらゆる障害を排して文化の炬を高く掲げよ！この言葉を以て新なる十年への門出の辭とする。